

第126回 子ども学講演会

「発達的地図」と「作戦会議」 ～保育園や学校でこどもの夢中を応援する作業療法～

◆プレゼンター 特定非営利活動法人はびりす

代表理事・作業療法士 山口 清明

作業療法士 奥津 光佳

特定非営利活動法人はびりす

障がいの有無や程度にかかわらず、子どもたちのGIFT（才能）を最大化することをミッションとして活動。児童発達支援事業・放課後等デイサービス事業・保育所等訪問支援事業等を岐阜県飛騨市と大垣市で行う。2022年度に書籍『子どもと家族が人生を描く発達的地図』（クリエイツかもがわ出版社）を発行。

◆司 会 西尾 新

甲南女子大学総合子ども学科 教授 / 教育心理学・人間発達論

西尾：こんにちは。4年ぶりに対面で「子ども学」講演会を実施することができました。今日で126回目になります。長い間、毎年講演会を「子ども学」という授業の中で実施してきましたが、4年間対面では実施できずにおりましたが、久しぶりに対面でできるようになって大変嬉しいです。

今日は非特定営利団体NPO「はびりす」からお二人の先生に来て頂きました。「はびりす」の代表理事で、作業療法士でもあられます山口清明先生です。（拍手）同じく「はびりす」で作業療法士として活躍されている奥津光佳先生です。（拍手）

少しだけご紹介をさせていただきますと、お二人には岐阜県飛騨市から、大変遠い所から来て頂きました。非常にお忙しいお二人で、普段は講演には来て頂けないのですけれども、今日は特別に甲南女子大学に来て講演をして頂けることになりました。

何をされているかという話ですが、先週も少し授業の中でお話ししましたけれども、困り事を持って

いる子どもたちのサポートを、学校という場所の中でしておられる方々です。今日はそのことについてお話をして頂きたいなと思っておりますけれども、授業を受ける、あるいはお話を伺う際の視点、どんな視点で見て頂いてもいいですが、2つだけお話しさせて頂こうと思います。

1つは、「子ども自身が決める」というキーワードかな、と私は思っています。総合子ども学科で皆さんは1年生ですから、これから子どものことについてまだまだ学んでいく段階です。授業の中の多くは、困っている子どもたちに対して、私たちが保育者あるいは教師としてどのような形でサポートするか、支援するかという視点で学ぶことが多いと思います。ただ、やはり困り事を持っているのは、子ども本人です。困り事がある世界を生きているのは、その子ども本人ですよ。どういう支援が必要なのか、どんな環境が必要なのかということを子ども自身が決めていく、そういう視点が必要なのかなと思っています。子どもが決めるという視点をどうサポートするのが、私たちの役割でもある。あるいは子どもだけで決めるわけではないでしょうから、子どもと一緒に決める、というような視点なのかなと思います。

2つ目の視点として、困っているのは子どもだけではなくて、誰でも少しは困っていることがあったりするわけですね。皆さん自身の困り事に対してどんな対応ができるのか、どんな風に考えたらいいのか。今までこういうことにずっと困っていたけど、もしかしたらこんな風に対応したら、対処したら、困り事が少し軽減するのではないかというような視点も考えてくれたらと思っています。

授業の中で質問とか感想とかを入れるフィードバックをMoodleの中に作りました。今、許可を頂きましたので、授業中にスマホを使ってそこに色々書き込んでもらっても全然構わない。授業中にスマホを出しても全然構わないということです。普段から私の授業はそうですけれども、ここがおもしろいか、あれはどういうこと？というような簡単なものでいいです。もちろん長い文章でも結構です。どんなことでも結構ですので、どんどん質問や感想を入れて頂けたら、それを途中で見てお話を頂けるかなと思っています。

今日は一般の方も来て頂けることになっていますので、後ろ2列の座席に来ておられます。では、お話をさせて頂こうと思います。よろしくお願い致します。

山口：皆さん、こんにちは。山口といいます。まず、始めるに当たりましてお願いしたいのですが、資料はあるんですが、せっかくなので資料は見ずに、ぜひ積極的に私たち講師とアイコンタクトをとって頂けるとありがたいなと思いますので、よろしくお願い致します。

皆さんに3つの質問があります。今日の授業、楽しい話が聞けたらいいなという方、手を挙げて頂けますでしょうか。（挙手）はい、ありがとうございます。楽しい話を聞くだけではなくて、今日の学びをいっぱい理解して、学びを最大限アップしていきたいと思っている方、手を挙げてください。（挙手）はい、ありがとうございます。頭の中に放り込むだけじゃなくて、自分が将来なりたい職業についた時とか、あしたから今日学んだことをどんどん使っていけるといいなという期待感を持っている方、手を挙げてください。（挙手）はい、ありがとうございます。

皆さん、ベストな場所にいらっしまいました。ここにいらっしまった皆さんご自身に拍手をしてあげてください。（拍手）

では、始めたいと思います。今日は「発達の地図」と「作戦会議」、というお話をさせていただきます。NPO法人はびりすから何冊か本を出しているんですけども、今日はこの紺色の本（『こどもと家族が人生を描く 発達の地図』）と青い本（『子どもと作戦会議CO-OPアプローチ入門』）のお話をさせていただきます。サブタイトルが「保育園や学校で子どもの夢中を応援する作業療法」です。どうぞよろしくお願い致します。始まり、始まり、始まりー。

作業療法って何だろうと思うと思いますけれども、とりあえず考える前に見て頂こうと思います。僕たちがどういうことをしているか、ということですね。

ある保育園に行きました。そこにはうちの療育施設に通っている、障害と共に生きているお子さんがいらっしまいます。このお子さんにこういう支援をしてください、と担任の先生にお願いしようと思っで保育園に行ったんですね。そしたら保育士さんが、「そんなことはできません」、と泣きそうな顔でおっしゃったんです。年少さんのクラスで4歳児さんがいっぱいいるんですけども、うちのクラスの子、みんな体力がなくて、風が吹いてくると「痛い」と言って教室に戻って来たり、すぐに床に寝そべったりして、集団を回すので手いっぱいなので、個別に配慮したり手をかける余裕はありませんというお困り事を頂きました。どうしたらこの保育士さんの役に立てるのだろう、と思ってやった作業療法の一場面です。ご覧ください。（動画・大人が転んで床にレゴブロックをまき、片づけるのを頼む。作業療法士が運ぶレゴブロックを落とさないようにと声をかける子どもたち。でもわざとぶちまけること

も。散らかったレゴブロックを、雑巾がけで集めて片付ける。)

これはだいぶ前の動画ですが、ちょうどこの子たちが生まれた時ぐらいからスマホがはやり出しています。10分も座れなかった子どもたちですけど、これはだいぶカットしていますが、1時間半ぐらい、雑巾がけを繰り返しています。「もう1回、もう1回」と言われて、子どもたちは1時間半ぐらいずっと雑巾がけをしているという動画でした。こんなことを、体を張って毎日させて頂いています。余計、作業療法のことがわからなくなったと思うんですけども、それでいいです。

申し遅れました。今日ナビゲートさせて頂く講師は、多動の山口とオタクの奥津です。私たちも、昔、困り感を抱えた子どもで、それから大人になって、だから彼らと一緒に生きていきたいと思って作業療法をしている2人です。奥津君は空気を読めなくて、今まで色々なことをやらしてきました。私は神戸出身なんですね。東灘区、白鶴美術館をちょっと上がった所に住んでいました。この岡本近辺でも学校に行かずにふらふらして、よく警察に補導されたことがあります。なので、今回は故郷に帰ってきたという感じです。

僕たちはフリースタイルの作業療法士です。作業療法というと、病院のリハビリテーションの一室で手の訓練をしているようなイメージを持っている方がいるかもしれません。それは狭い範囲の作業療法です。私たちはもともと病院にいたんですけども、自分たちが理想とする作業療法をやりたいということで病院を出て、起業して、今は岐阜県の飛騨市で作業療法をやっています。

『君の名は』という新海誠監督の映画を見たことがある方、どれぐらいいらっしゃいますか。ほぼ95%ぐらいですね。この三葉ちゃん、口噛み酒の神社は職場から北に上がっていった所にもあるし、このシーンは駅ですけど、この駅の隣のちょっと手前の建物で私たちは仕事をしています。

私たちは飛騨市を丸ごと作業療法室と考えて、学校だけじゃなく、小中学校、教育委員会、市役所、保育園、介護施設、福祉事業所、企業、もしくは警察に捕まってしまった人の所に行きますし、医療とか子ども相談センターとか、ありとあらゆる場所に自分たちが出向いて行って作業療法をやっています。まあ落ち着いた作業療法をやっている。その中に私たちの経営する福祉事業所もあるという形ですが、色々な所に出向いて作業療法をしています。

NPO法人「はびりす」は、正式名称は特定非営利活動法人ですけども、社会を変えるために仕事をする会社です。社会をどういう風にしていくのかというと、「全ての人にはGIFTがある」というミッションがありまして、どんな人も、その人の味わいや良さにスポットライトが当たるような社会に変えて

いくために作業療法を展開していこうということで、法人を立ち上げました。

今日のお品書きでございます。まず、皆さんとテーマを1つだけ絞って、今日の授業を通してこの問いに答えを出していこうと思います。よろしいですか。「私たちは子どもたちとどう向き合ったらいいのか」という問いです。それは、作業療法だからとか、お母さんだからとか、先生だからとかは関係ありません。「私たちは子どもたちとどう向き合ったらいいのか？」を、今この時代にみなさんと一緒に考えていきたいなと思っています。

先に結論ですけれども、「子どもと大人の夢中をぐるぐる回す！」という結論です。問いは「私たちは子どもとどう向き合ったらいいのか？」、結論は「子どもと大人の夢中をぐるぐる回す！」です。

ポイント（要点）は3つです。1つ目、作業療法は「ざんまい」療法ということです。作業療法って何だろう、これは「ざんまい」療法ですよ、ということを説明していきます。ポイントの2つ目は、大人が子どもにしかける「発達の地図」というお話をさせていただきます。ポイントの3つ目が、子どもが大人にしかける「作戦会議」です。この2と3をぐるぐる回すと、子どもと大人の作業療法が回っていくというお話です。よろしいでしょうか。

ここから先は課金制になるんですけれども、皆さん、大丈夫ですか。もうちょっと砕けてくださいね、僕が緊張してくるので。PayPayでもOKです、というのは冗談です。

1つ目に入りたいと思います。作業療法は「ざんまい」療法ということですね。作業療法を英語で表現するとOccupational Therapyという名前になります。Occupationって、海外に行った方はわかると思います。空港で通る時に「仕事何してますか」「学生です」「主婦です」「作業療法士です」というので職業という意味で使われることが多いと思うんですけど、その他にも「占有」とか「占領」という言葉があるんです。そのことでいっぱいになる、夢中になる、というような意味もあります。Occupationというのは、日本語には正確に訳せないのですね。ただ、仏教用語に「ざんまい（三昧）」という言葉がありまして、無我夢中になるというのがOccupationを訳した時に、一番正しい言葉じゃないかなと個人的に思っています。

皆さんもそうですよね。何か好きなことに打ち込んで、頭がそのことでいっぱいになって、夢中になって我を忘れて何かに没頭した時に、幸せを感じたり、時間が止まったように感じたりします。そういう状態になると、人が回復したり、健康になったり、元気になったり、色んな効果がありますよということで、Occupational Therapyが生まれました。こういう古い古典の図とかを見て頂いたらわかるかと思

います。

今日は子ども学ですので、「子どもにとっての夢中って何だ」というのを皆さんとまず考えていきたいと思います。子どもにとっての作業は何？ということですが、ちょっとこの動画を見てください。

(動画)

可愛かったですよね。赤ちゃんの脳みそはすごく多動にできていまして、最近の研究でわかっているのは、1歳ぐらいの赤ちゃんは普通に1時間に3,000歩ぐらい歩きます。徘徊するアルツハイマーのおばあちゃんでも3,000歩は歩きません。平均すると1時間に20回近く転倒します。このステップを見ると、後ろに行ったり前に行ったり、クルッと振り返ったり、複雑なステップを踏んでいます。1歳から2歳で脳みそのシナプス、神経回路は、大人の1.5倍から2倍ぐらいにパッと広がります。だんだんそこから神経細胞が抜け落ちて、大人の脳になっていくということです。

乳幼児期において一番大事なチェック項目は、健診でも飛騨市ではちょっとずつ変えてきているのですが、言葉が出ているとか、ハイハイができているとか、立てるとか、理解できているとか、目が合っているということよりも、「遊べているか、遊べてないか」というのが非常に大事です。

ちょっとこれを見てください。6カ月ぐらいの赤ちゃんです。まだ喃語しかしゃべれません。ピーナッツバターを塗りたくっているんですけど、このコミュニケーションの中で主導権を握っているのは赤ちゃんです。僕は赤ちゃんの喃語を翻訳してみたので、それを見てください。(動画・「ちょっとあなたたち何してるの」「弟に何してるの」「ゴシゴシしてるの」「いけてるやろ」等々)

赤ちゃんは、既にQOLが高いし、知性も高いんです。ただ、私たちとは考え方とか生きている次元が違って、日本では昔は「7歳までは神のうち」と表現されていました。赤ちゃんは神様ですよ、神がかってますよというのが、こういう映像で見るとれると思います。

0歳から2歳というのは、ハイハイしたり指しゃぶりをしたり、自分の体を操作して遊びます。2歳から4歳ぐらいになると、自分の体がわかってくるので、体という道具を使って積み木を積みみたいな感じで、物を操作し出します。対象操作が自分の身体から物に移りますね。4歳から6歳ぐらいになると、お店屋さんごっことか、物よりもっと複雑な人を操作して遊びます。それが例えば、生活発表会とか運動会とか受験勉強とか、仕事、結婚、恋愛、育児という風に、操作対象が複雑化していきます。つまり、遊びが発展していくのが我々の生涯発達なんですね。楽しんでやると遊びで、やらされてやるのは義務的で仕事の事であるということです。

作業療法士にとって大事な最初の芽生えは、お母さんと子どもが「遊んでいるか、遊べていないか」です。皆さんもそうです。今ここに集まっていますけれども、遊ぶように生きていたり勉強できている人は、QOL、健康感、幸福感が高く、作業療法の対象ではありません。障害がなくても、もし皆さんが遊べてなければ、作業療法の対象になります。

私たち発達をやっている作業療法士にとって大事なのは、遊びです。子どもと大人の遊びがぐるぐる回ることが大事なんです、遊びの大事なポイントは自発性です。自分からああやりたい、こうやりたいというのを考えて、ああしてみよう、こうしてみようという作戦を回していくことになります。

私からは「発達的地図」のお話をさせていただきます。オタクの奥津君は「作戦会議 (CO-OP)」という話をさせていただきます。

ここまで聞いて感じたこと、気づいたことを、お隣の方とシェアしてみてください。2分ぐらいOKです。どうぞ、ペチャクチャしゃべってください。1人になっている方とかも巻き込んでお話ししてくださいね。(話し合い)

皆さん、それぐらいにしましょう。拍手してください。(拍手)

一旦、ぐっと背伸びしてください。ストレッチすると固有感覚が脳神経に刺激を送って、覚醒が上がって、脳の空き容量ができて次の聞く部屋ができてきます。ストレッチした後、フーッと力を抜く。はい、ありがとうございます。

1つ目のお話は、作業療法は「ざんまい」療法、遊びに夢中になるというお話でしたが、皆さん、ちょっとご理解頂けたのではないのでしょうか。あと、質問をたくさん送って頂いて、ありがとうございます。バシャーレという単語が見えておおと思ったんですけども、書いた方とは後でぜひお話ししてみたいなと思った次第です。

では、2つ目のお話にいけます。2つ目は、大人が子どもにしかける「発達的地図」ということです。私たちは子育て支援をしています。障害があってもなくても、学校の先生、保育園の先生、お母さん、みんなが子どもと関わる時に、子どもと大人が楽しいやりとりができるような環境設定とか考え方を提供しています。

保育園、小学校だけじゃなくて、会社とかもそうですよね。「この人、空気は読めなくてコミュニケーションはだめですけど、数字を扱わせたら最高なんですわ。だからこういう部署で働くといきいきすると思いますよ」とか。市役所でいうと、ぼーちゃんみたいにぼうっとしていて、すごく鈍感な人がい

る。自発性が低いとか自分から仕事できないと言われるんですけど、ストレスに対する耐性はめちゃくちゃ強い。そうすると、生活保護の受給とか生活困窮とか、ストレスフルな職場に配置転換すると、いきいきと仕事をしていたりするんですね。繊細な人は逆に経理とかそっこのほうに行くと、すごくいきいきと仕事をする所もあります。

ちょっと話が脱線しましたが、大人が子どもにしかける「発達地図」です。子どもたちをどう応援していくのかという時に、この「発達地図」という道具を作りました。こちらについて、今から説明させていただきます。

自分らしい人生を生きていきたいという人、どれぐらいいらっしゃいますか。誰かが敷いたレールの上を歩いていきたいという方は、どれぐらいいらっしゃいますか。パパが決めた相手と結婚したい、お母さんが決めた就職先に就職したい。自分の仕事とか趣味は自分で決めたいという方は、どれぐらいいらっしゃいますか。はい、ありがとうございます。ぽっかりですね。

でも多くの人は、大体、悩んで生きているんです。もうちょっと身長が高かったらとか、もうちょっと偏差値がよかったらとか、もうちょっとお金があったらとか、あれが欲しいのに手に入らないとか、病気になったらどうしようとか、彼氏と喧嘩してこのまま嫌われてしまったらどうしようとか、色んなお悩み事が渦巻いていると思います。子どもから大人までみんな悩んでまして、人は悩みながら死んでいくものだという研究結果も出ているんです。特に日本人は悲観的ですので、あまり幸福度は高くありません。

皆さんもお悩み事がありますよね。お隣の方と、これさえ解決したら私の人生変わるんじゃないかしら、というお悩みを出し合いっこしてみてください。カミングアウトできるレベルでOKです。2分ぐらいお時間を渡します。（話し合い）

はい、一旦ここまでにしましょう。ありがとうございます。

皆さん、今話し合ったお悩みって、どれぐらいの期間、悩まれてましたか。気がついた時からずっとという人もいらっしゃると思いますし、ある時点からという人もいらっしゃると思います。質問したいことが1つありまして、それはいつ解決できますか。何月何日にそこから解放されますか？

障害のある方もそうなんです。訓練しようが病院に行こうが、多くの人は障害とともに生きていくしかないんです。多少、良くなるかもしれないということですね。脳性麻痺の方だったら、一旦良くなって、18歳ぐらいからずっと下り坂です。人生ずっと慢性疾患なんですよ。だからこそ、悩みと共

に、障害と共にいきいきと生きていくことをお手伝いするのが作業療法士の役割になってくるわけです。大事なのは、今皆さんが話しした内容というのは、解ける問題でしょうか、ということです。

この「発達地図」というのは、実は六甲アイランドで生まれました。いきなり何の話をしているんだと思われるかもしれませんが、僕が小学校2年生か3年生ぐらいだったと思います。うちの母親が車に乗ってハンドルをにぎっていて、夜の六甲アイランドの防波堤に車を停めていました。助手席に僕は座っていました。母親は「あなたと一緒にこのまま六甲アイランドの海に飛び込みたい。私の産み方が悪かったわ」と言って悩んでいました。僕はその時は情緒があふれ過ぎていて、ずっと喧嘩したり、岡本でもよく警察に捕まったりしていました。自分をどうしようもできなくて。母の横顔を見ながら、生まれてきてごめんなさい、という風に思ってたわけです。

ずっとごめんなさいとっていて、それで作業療法士になって、これは1年前に『発達地図』を出版したんです。母親は60を過ぎているんだけど、「今だったらおかんの悩みを解決できるで」と持って行ったら、新聞紙で頭をパンと叩かれて「遅いわ」と言われた。「私は許さないけど、今から色んなお母さんの所に行って、過去の私みたいに子育てで困っている人を救ってあげてください。一生懺悔して回りなさい。一生償いなさい」みたいな感じで言われて、「はい」と言って今ここ（甲南女子大学）にいるわけです。ちょっと話が脱線しました。

兄貴はすごい優等生でした。お受験して、灘中は落ちて開成中学校に行ったんですけど、当時、岡本にある塾に通っていて、スポーツも万能、女の子にもモテるという感じですね。その後、東大に行きました。僕は学校に行けなくて、警察によく呼び出されるみたいな感じだったんですね。うちの母親からしたら、突然変異で狩猟民族の子どもがうちの家に生まれてきた。生活リズムが大事とか、愛情深くとか、明るい子育てとか、丁寧な子育て、理解のある家族とか、優しいママとか、全部やってきたのに、全部私に裏切られてしまったんです。で、上手くいかない、うちの子はエネルギー過ぎておかしい、うちの子は何かが違う。だんだんだんだん鬱になってくると、誰もわかってくれないという風になる。「清明がこんなに悪いことをしてるのは、おまえのしつけが悪いからだ」と父親に言われて、誰もわかってくれない、という孤立感が増してきます。最終的なやばい状態、もう他に逃げ先がなくなると、私の産み方が悪かった、という感情に追い込まれていくわけです。昔はコミュニティーで子どもを育てていましたが、今は核家族で、家でポツンとお母さんだけで子育てをしているので、悩み行き先がなくなってくる。そうすると、さっきのように子どもと一緒に六甲アイランドへ飛び込みたい、みた

いな感じになってくるわけです。

それは解ける問題ですか、ということです。もし解ける見通しが立ってなかったとしたら、それは「沼地問題」です。その悩みで時間を費やしてしまうと、あっという間に人生の大事な時間を奪ってしまいます。そうすると悩みながら最後、命を閉じていくというコースにはまってしまうわけですね。これを沼地問題と名づけてみたということです。

まさか30歳過ぎたあたりから、やっとなんと落ち着きが出てくるなんて、うちの母親は予測してなかったわけですね。でも、人生なんて、長いスパンで見ないとわからないわけです。沼地でずっと悩んでいても答えが出ないので、「沼地から出る」ことが大事なんですね。でもスマホで検索して「こういうやり方がいいよ」というたった1つの1%の上手くいくHow-to、よくあるじゃないですか。やってみて、一瞬よくなったような気がするんですけど、結局同じような悩みにまた舞い戻ってきて、沼地を歩いていることが多いです。

皆さん、よく考えてください。人生というのは旅です。どこに行きたいかというのをちゃんとセットして「地図」を持たないと、いきなりアフリカの紛争地域とかに行って、生きて帰ってくる確率は低いわけですね。人生も一緒です。ちゃんと私たち家族はどこに行きたいのか、私たち家族をどんな風に捉えるといいのかな、どんな進み方で進んでいったらいいのかなと発達を俯瞰してみないと、人生というのはなかなか上手くいかないわけです。「今ある問題点をどうやって解決するか」よりも、「どの問題を解くべきか」がものすごく大事です。だから、一度高度を上げて違う景色を見てみませんか、というのが作業療法計画になります。僕のこういうアグレッシブ過ぎる所に悩んでいましたけど、他の場所を見してみると、そこは小さな沼だったということがみつかるかもしれません。

ここに3つの質問があります。「沼地を見る」、「山の上で見る」、「大空で見る」。この質問に答えていくことで、ちょっと困っていることが消えたら、こんなことがやってみたい、その先こんな人生を歩んでいきたいというのも見えてきます。困っていることからやってもいいし、やりたいことからやっていってもいいわけですね。地図を描けば選択肢が出てくるということになります。

では、1つ1つ、事例を出していこうと思います。3つの道具があります。「コンパス」と「望遠鏡」と「船」です。

「コンパス」です。皆さん、①困っていることは何ですか。さっき出しましたね。②そのお困り事かもしフッと消えたとしたら、どんなことがしたいですか。ちょっと想像してみてください。③その先は

どういう人生を歩んでいきたいですかといった時に、3番からやってもいいし、2番からやってもいいし、1番をやってもいい、という風に思えてきます。

保健センターに行きました。保健師さんとお母さんが、神妙な顔で僕に相談に来ました。「うちの子、全然目が合わないんです。ずっとトーマスを並べて遊んでいます。言葉はありません。コミュニケーションが全くとれないし、心が通じ合いません」。保健師さんは、自閉症っぽいなという感じで、でもお母さんが傷つきそうだな、とってお母さんを連れて作業療法相談に来ました。

子どもがトーマスで遊んでるじゃないですか。子どもはトーマスが好きなんだなと思ったので、お母さんのおでこにトーマスのシールをピッと貼ったんですよ。そしたら、子どもが気がついてお母さんを見て、お母さんの腕をつかんでそれで目が合ったと言って、お母さんが泣き出したわけです。トーマスで遊べるから、お母さんにトーマスを貼ったら目が合うじゃないですか。「僕、作業療法でこのお子さんの伸ばし方のアイデアをたくさん知っているんですけど、療育に来ませんか」と言ったら「行く」という風になった。お母さんは「私がトーマスになればいいんだ」と言って、お箸にもトーマス、座る所にもトーマス、パパのほっぺたにもマジックでトーマスの絵を描くみたいな感じで、お家中トーマスだらけにしたら、すごい遊べるし、保育園に行くのにパニックが起きていたんですけど、どこに行くのもアグレッシブになっていったという事例があります。

自閉症かもしれない、どうしたらいいんだろう。自閉症ってそのままなの？とか、自閉性を減らしていくことはできるの？という行き先だと、人生を詰んでしまったかもしれないけど、トーマスだったら遊べるんだから、まだ発達年齢が低いし、自閉症かどうかもわからないけど、トーマスを通していっぱい楽しむ家族になっていくという行き先であれば、同じことをやっても全然違うルート旅になるわけですね。

「発達の遅れを取り戻すには？」、というのが保健師さんの行き先でした。だから保健師は、どうやってこの母親を発達のクリニックに案内したらいいんだろう、ということで悩んでいたんです。ここで言っちゃうと傷ついちゃうかな、みたいな。作業療法士は「親子の等身大の成長は？」、という所を行き先として設定しています。別に障害があろうとなかろうと、関係ないじゃん。まずは遊べないと障害受容も何もないんだし、遊べる所を探していこうよ、と思っているわけです。「うちの療育に来ない？」と言ったら、「行く行く、主人を説得してくる、おじいちゃん・おばあちゃんを説得してくる」という感じになってくる。同じことをやっても、問いの立て方が違うだけで、全然違う幸福度にな

ってくるわけです。聞いて大事ですよ。

日本人は、問いを立てるのがすごく苦手です。小さいころからみんな、先生が作った問題を答えていくじゃないですか。そうやって他人が作った答えを解かなきゃいけないという風に、だんだん育て上げられてくるわけです。でも、例えば「環境のためにCO2の濃度を減らすには？」とか「ナンパの成功率を上げるには？」という問いをそれぞれが自由に立てて、数学の授業を受けて、その数式を使ってこの問いに答えていけるのかを論述すればいいわけです。三宮センター街でこういう風に声をかければ統計的にナンパの成功率は上がるだろうとかね。ちょっと話が飛び過ぎていますがけれども、そうやって一人一人の問いに答えるように学んでいけば、論理的思考が身についてくるはずですよ。考えさせない教育をトレーニングさせられてきた私たちが自ら考えられるように『発達の地図』のコンパスという道具があります。

次の道具は「望遠鏡」です。①「どんな困った場面がありましたか」。困った場面はあったでしょうけれども、さっきのトーマスの事例みたいに、②その中でも「何かできていたことはありますか」。③「我が子にあだ名をつけるとしたら？」という3つの問いが用意されています。

すごく多動なお子さんがいました。シングルのお母さんで、仕事をしながら家事を回しているんですけども、ものすごく大変だったんですね。いつも保育園から、お友達をいじめたとかいって、先生から連絡を受ける。お母さんは、ちゃんと育てなきゃいけないという責任感から、毎日子どもをガミガミガミガミ怒っていた。子どもは家から脱走していくみたいな状態だったんです。すぐ切れる我慢できない子という風にみんなが捉えていて、ちゃんとソーシャルスキル・トレーニングをしなきゃいけない、みたいな話になってたんですよ。

でも、その中でも「できていた場面は何ですか」というと、年下の子には優しい。すごいお世話好きで、泣いてる子がいたらシュッと飛んで行って、すぐ助けてくれる。「じゃ、この子には、そこをあだ名をつけたら」と言うと、「お世話好きな野生児、でも止めるな危険」みたいな感じでお母さんが言ったんですよ。「ちなみにお母さんの小さいころってどうでした？」と言ったら、「私も同じでした」と言ったので、「DNAですね。お母さんのように立派になりますね」と言ったら、お母さんもちょっと気持ちが変わって、止まっていると怒るみたいな感じになってきたんです。「もっと動きなさい、お手伝いなさい、止まったらダメ、落ち着いてたらいけない、動いて人の役に立ちなさい」みたいな。江頭2:50さんの動画とかを見せて、こういう大人になりなさいと言いながら育てるようになっていった

ら、めっちゃお母さんの言うことを聞くようになったんです。「止まれ」と言うと困る子どもだったんですが、「動け」と言われると嬉しいので、どんなことでも指示を聞いちゃうよ、みたいな感じになっていったという事例です。

『千と千尋の神隠し』を見たことがある方、どれぐらいいらっしゃいますか。その考え方と一緒にですけど、オクスレ様からみんなは逃げていった。不潔な神様みたいな感じですけど、千尋はオクスレ様も他の神様と同じように扱ったら、福の神になっていったわけですね。落ち着きがないけれどアイデア豊富とか、そういうふうには人は良いか悪いかの二元論じゃなくて一元論、コインの裏表でできているので、同じ事象をどういうふうに見るかで、相手が表現してくれる行動とかが全部変わってきますよ、ということ。だから、捉え方がすごく大事です。

医学的な診断では、情緒障害とか、学習障害とか、軽度知的障害とか、アスペルガー障害とか、染色体異常、ダウン症という風に、問題点にフォーカスするんです。生活を豊かにする作業療法は、もちろん科学的にこういう見方もできますけど、アートの見方もあって、「彼は繊細なスーパー・エリートです。ドクターは情緒障害、学習障害と言うかもしれないですけど、不器用ですけどすごい努力家で、彼が努力していると、クラスみんながそれにつられて努力してくれるんですよ。信頼の証です」とか、「知的障害という見方もできるかもしれないけど、憎めないひょうきん者で癒し系です」とかね。そんな感じでリフレーミングしていくことが可能です。問題は変わらなくても、捉え方を変えるだけで、全然違った発達プランが見えてきます。ADHDだ、薬物療法で抑えろというのもできるかもしれないですけど、狩猟民族タイプの行動派だから、どんどん動いて江頭さんのようになって社会の役に立て、という風なこともできるかもしれません。

繊細さんだったら、引きこもり不登校にもなりやすい。のび太君みたいなタイプね。「えーん、いじめられたよ」みたいな人もいれば、聴覚過敏なので調律師とか視覚過敏なら芸術家になる人もいる。神経質な人、スネ夫君みたいなタイプは、ネチネチおじさんみたいにもなるし、経理とか法律という職業に向いてたりもする。落ち着きのない人がいたら、暴走族みたいに殴り合うと気持ちいい人もいれば、どんどん動いて仕事をするやり手の営業マンや起業家になる人もいます。ぼーっとするぼんやりさんであれば、指示待ち人間といって社会に出たら怒られる人も多いですけど、福祉職場に来ると、癒し系とか傾聴力があるといって重宝されたりします。自分の個性は、捉え方一つで味わいになりライフデザインに使えるわけです。

最後に3つ目のアイコンの「船」です。「これまで困ったことに対してどんなことをしてきたんですか」「これからどんな工夫をしてみるんですか」。最後に一番大事なのが、「ストーリー仕立てにしてみたら」ということです。

ある男の子を紹介します。手先が不器用なアキラくんという人がいました。脳の右と左が上手く協調しないので、左手は専ら持つ方ばかり、右手を使ったら左手が離れちゃう。あと、交差する運動が難しかったり、切る時の運動感覚がすごく粗くて上手く切れなかったりする。作業療法でいうと、例えば、破った時の感覚が入る素材とか、姿勢が整うように一脚のラウンド型の椅子を使ったりする。（動画）

バネつきのハサミを使ったりとか、色んな工夫があるんですけど、それはそれで置いて、不器用な手先を直すために、ハサミを工夫したり教材を工夫したり、声かけの仕方を工夫したりということも大事ですけど、それ以上にもっと大事なことがあって、物語が大事なんです。どんな物語の中で、手先が器用になっていくのかということです。登場人物が困難に出会って乗り越えて進化して、また困難にぶつかって乗り越えて進化していく。これを「ヒーローズ・ジャーニー」といいます。これがストーリーの構造です。

『ドラえもん』でも『ONE PIECE』でも、何でもこの構造になっています。サイヤ人がスーパー・サイヤ人になって、スーパー・サイヤ人がスーパー・スーパー・スーパー・サイヤ人になって成長していきますよね。特に日本人は判官ほうがんびいき最良さいりょうと言って不器用な人が大好きなので、のび太君がイケメンだったら売れないんです。のび太君が不器用なのに課題を乗り越えていくから、「のび太君は私だわ」という共感が生まれて、みんなが応援したくなるというのがヒット作品を生むコツです。

子どもたちを応援する時も、それと全く同じ構造です。不器用なアキラくんが、ストーリーを通してハサミが上手になっていく物語を他の子どもたちとシェアしたい、ということになるんですね。そうすると、ハサミで切る場面だけじゃなくて、その前後がすごく大事なんです。（動画）当時年長さんだったこの子たちはもう中学生ぐらい、小学校6年生ぐらいかな。でも、今だにこの時のエピソードを覚えてるんですよ。

「発達の地図」の結論ですけど、何が言いたいかというと、僕たちはやっぱり「物語を生きています」ので、「地図」を開いて、子どもとかご家族とか先生たちと「旅に出よう」というのがこの本に書かれていることで、「書き込んでいくこと」で皆さんがそういう支援ができるように作られたもので

す。一回まわしますので、手に取って見てください。

ポイントの2つ目が終わりました。ポイントの3つ目はオタクの奥津さんにお渡しします。ここからは、子どもが大人にしかける「作戦会議」です。よろしくお願いします。

すみません、「発達的地図」で気づいたこと、感じたことをお隣の方と1分半ぐらいシェアしてください。それだけで学びとれることがありますので、どうぞおしゃべりタイムです。（話し合い）

奥津：山口からバトンタッチしまして、今度は奥津がお話をさせていただきます。

「オタクの奥津」という紹介をしてもらったんですけど、何がオタクなのかという紹介をさせてください。一言で言うなら、作業療法オタクなんですね。なぜそんなオタクになってしまったかという、僕、人間がすごく苦手なんですね。人と顔が合うだけでドキドキしますし、今も心臓がバクバクしてますし、上手くしゃべれないし、子どもと遊ぼうと思ったら子どもを泣かせてしまうという、ひどい新人時代だったんです。でも人間のことに興味があって、人と仲よくなりたくて、作業療法という仕事に出会って色々調べていったらオタクになってしまった。そんな奥津ですが、今日はよろしくお願い致します。（拍手）

僕からお話しすることは、子どもが大人にしかける「作戦会議」というものです。一体どういうことなんだろう、ということのをこれからお話ししていくんですけども、最初にイメージだけ持っておいてほしいのが、僕の大学の後輩で、ちょうど皆さんと同じ1年生、18歳で作業療法士を目指している女の子がいるんですけども、その子と話した時に「やばい」「うざい」「死ぬ」の大体3つのワードで会話が展開されていくんですね。「それってどういうこと？」という話をしたら、言葉は「やばい」と言っているけれども、「私はすごく感動してるんだ」と解説をしてくれるんです。皆さんにお伝えしたいことは「自分から見る子ども」と「子どもが思っている自分」は大きく差があるぞ、すれ違いがあるぞという所が、作戦会議をしていく上で大事なポイントになってくるということです。

最初にちょっと動画をご覧ください。「困った時は作戦マン」という動画です。（動画）これは給食前の校内放送を、ある小学校で毎月1回行っているんですけども、こういうふうに「作戦」というのを校内のテレビ放送を通して子どもたちに紹介しています。こうやってサングラスをして、Tシャツを着て、これは僕ですけども、精いっぱい笑かそうと思ってやっている動画です。この「作戦」は子どもたちにキーワードとしてかなりヒットしまして、最近小学校の中を歩くだけで「作戦マンが来た」と

言って子どもたちに追いかけるようになったんです。

今、飛騨市の小学校で、全ての子どもと「作戦会議」ということを行っています。学校の中に作業療法室を作りまして、こちらの動画ですけれども、「作戦会議だよ」と言って授業の時間をもらいます。これは特別支援学級で作戦会議の授業を行っています。今、飛騨市内の全部の小中学校を回りながら、「みんなで作戦会議していこうよ」という授業や研修を子どもたちあるいは学校の先生とやっています。

一体「作戦」って何、という所ですけれども、例えば不器用さんがいます。僕は速く走れるようになりたいとか、ドッジボールが上手になりたいとか、縄跳びが上手になりたいとか、学校の生活の中で上手になりたいことはたくさんあるんですけども、なかなか上手いかない。「どうしたらいい？ 作戦マン」というので、一緒に作戦会議をしていくんです。

この不器用さんが考えた作戦としては、走る時に手がばらばらにパタパタしてしまうから、僕はカチコチで走ると上手くいくんだ、ということであったり、ドッジボールをする時に、いつもボールを見ずに避けようとしたりキャッチしようとするから当たってしまうので、ボールを最後までしっかり見たら上手くできるよ、ということであったり、縄跳びを飛ぶ時は「いちに、いちに」と口ずさみながら飛ばすように上手いんだ、という風な作戦を考えてみたり。この不器用さんが考えてくれたように、「どうしたら自分がやりたいことが上手くできるようになるんだろう」というのを考えていくのが「作戦」になります。

色んな作戦があります。例えば、子どもたちの中にすごい怒りんぼさんがいるんですね。休み時間のたびにトラブルが多発する子。あっちに行ったら友達と言い合いになって、こっちに行ったら友達と殴り合いになってしまう男の子だったんです。その子の願いとしては、優しくなりたい、友達と優しく関わりたいんだ、という思いがありました。その子と一緒に立てた作戦が、1つは「深呼吸作戦」です。いつも心臓がバクバクしてしまって喧嘩になるから、ゆっくり深呼吸してから休み時間を迎えたら仲よくなれるんだ、ということをやったり、「スルー作戦」、ちょっとしたこと、「ばか」とか「やめろ」とか言われるとすぐに手が出てしまうので、そういう言葉が飛んできて耳から耳に流すようにスルーしていくんだ、という作戦。最後は「メーター作戦」です。自分の心の調子、気持ちの調子を、メーターで目で見える形で確認してから休み時間に向かっていく、というような作戦を考えたりしてくれています。

他にも色んな子たちがいます。ドキドキさんですね。このドキドキさんは、授業とかで発表がしたいんです。「答えを教えてくれる人」という時に、挙手をして答えたい。班分けをした時に、グループで話し合ったことをみんなの前で堂々と話したい。でも「ドキドキしちゃって上手くいかないからどうしたらいい?」、といった時に、色んな作戦を考えてくれたんですね。1つは「瞑想作戦」というものです。最近だとマインドフルネスと言ったりしますが、頭の中を整えてから発表に臨んだら落ち着いてできる、ということだったり、「なりきり作戦」、私はスーパーヒーローだ、最近だとプリキュアになった気持ちで発表に臨んだら上手くいくよ、ということだったり。後はいつも緊張して失敗して、失敗が怖くなってしまふから、失敗はOKという気持ちで臨んでいったら上手くできるんだ、という風な作戦。

最後は、空気が読めないさん。この子は、お友達ともっと仲よくなりたかったんですね。ただ、教室の中で何が起きていたかという、めちゃくちゃ友達の近くに行くんですよ。30cm、下手したら鼻がぶつかるんじゃないかというぐらい顔の前に行って友達とおしゃべりをするので、周りから人が離れていってしまったんですね。本人はすごく仲よくなりたいのに、やたら近づいてしまうから、どんどん友達が離れていってしまうということが起きていました。その子と立てた作戦は、例えば、腕の距離で関わると友達と仲よくなれるということであったり、グループの中に入っちゃうと友達と上手くおしゃべりできないから、1対1で僕は仲よくなっていくよ、ということをやったり。最後は、いつも相手の顔とかが吹っ飛んでしまって自分1人で話してしまうから、相手の笑顔を想像しながら友達と関わると上手くいくんだ、というような作戦を立てたりしてくれました。

ここまで「作戦」のお話をたくさんしてきたんですけど、でも「作戦」って一体何だろう。ちょっと、まだイメージがつかないと思います。ここから先、色んな子どもたちが出てきます。色んな子どもたちですけど、これから保育士さんあるいは学校の先生になる皆さんが、多分、人生の中で何度も出会う子たちです。何度も出会うようなタイプの子たちをお話ししていこうと思います。

この男の子は、小学校2年生でした。学校の先生に呼ばれて学校に行ったら、大変なことが起きていたんです。というのは、授業のたびに教室を脱走してしまったり、授業が始まって何とか教室の中に留まっているんだけど、教室のヒーターの前から微動だにせず、体育座りあるいは寝そべってしまつて、絶対にテコでも動かない、というような状態が続いていたんですね。

さてさてどうしようといった時に、ある男の先生が現れました。その先生はすごく体育会系の先

生で、「何々しなさい」「これしなさい」「それはOK」「それはだめ」と、はっきり言ってくれる先生だったんですね。その男の先生は、小学校2年生の男の子の憧れになりました。その先生の授業だったら、僕はビシッとして何でも話をするぞと、授業への参加をしてくれていたんです。

ただ、小学校あるあるですけれども、学年が変わる時に、その先生が異動してしまったんですね。男の子は悲しみに暮れたわけです。もう僕を導いてくれる人がいなくなってしまったとか、これから先どんな先生が来るんだろうという不安とか、果たして上手くやれるのかな、ということが起きました。結果として、4月、また教室の中にいられなくなってしまったんですね。僕の大好きな先生がいなくなってしまうと、授業もおもしろくないし、楽しくない。学校に来る意味なんてないやと。教室を飛び出したり、日によっては校庭に出ていたり、学校から出て行ってしまったりすることもありました。

その時の担任の先生と僕とこの子で、作戦会議をしたんですね。作戦会議をしていく中で、男の子に「君はこれからどうしていきたいの？」という話をした時に、「僕は昔の担任の先生みたいに学校の先生になりたいんだ」という目標が出てきたんです。「じゃ、そこを一緒に目指していこうよ。今は悲しみに暮れているかもしれないけど、ここから先どういう風に進んでいったらいいんだろう」と話し合いをした結果、こういうシートができ上がったんです。

その男の子は、すごく心臓がヒートアップ、頭もヒートアップする子でした。結果として、悲しい出来事に出会うとエンジンがかかり過ぎて、悲しみに暮れてしまう。そこからどうやって次のステップに進んでいったらいいんだろう、という作戦会議をした時に、「一緒に未来の予測を立てていったら、いいんじゃない？」という話になったんですね。学校の先生を目指すために、自分の心の調子を整えながら学校で生活していく。そのためには、未来の自分の予測を立てて生活していったら上手くいくんじゃないか、という作戦をもとにつくられたのがこのシートです。例え、悲しみに暮れていたとしても、だんだん時間がたてば慣れていくし、学校が楽しくなっていくし、いい感じに過ごしていける。そんな作戦を立てて、彼は今小学5年生になったんですけれども、色んな違う先生と学校で生活ができるようになっていきました。

次は、ある女の子のお話です。この女の子は、学校で授業に参加しているんですけど、全部やっている「ふり」だったんですね。先生もプンプンして「何でいつも適当にやってるふりをするの？一緒にやっっていこうよ」。お母さんからは「宿題もいつもやらない。ちゃんと提出して、勉強頑張っっていってよ」。先生からお母さんからもガミガミ言われていたんですけど、面倒くさい、だるい、Tik Tokの

方がおもしろい、ダンスしていたい、という風な女の子だったんです。

ここで僕が「助けて、作戦マン」ということで、一緒に作戦会議をしていったんです。この女の子の目標としては、渋谷109のカリスマ店員になりたい。キラキラおしゃれなカリスマ店員さんになって、服の販売をして、将来働きたいという夢があった。「じゃ、今何をやっていくのかを決めていこうよ」という作戦会議をした上で作ったのが、このシートです。こういう未来に向かっていきたいのだったら、「あなた、せめて電卓を使って計算できるようにならないとレジが打てないよ」とか「商品説明ができるぐらいのコミュニケーション力がないと、店員さんになれないよ」となった時に、「じゃ、私ちょっと勉強していこうかな」と勉強に参加できるようになった子です。

今までのお話で一番大切な所は、話がすれ違うことがよくあります。特に最初の男の子は、2回目に授業に参加できなくなった時に、周りがすごく慌てたんですね。先生は何とか授業に参加させないといけないと思って一生懸命関わるし、ご家族、お母さんは何とか学校で頑張ってください、と毎日叱ったり押し出し続ける。ただ、結果として本人は気持ちがついていかず、勉強が難しい、参加できなくなってしまったんですけれども、どんな子にも目標、やりたいことがあります。それは大人が思っているようなことではないかもしれませんが。先生あるいは作業療法士が思っているようなことではないかもしれません。ただ、どの子にも「やりたいこととか、できるようになりたいこと」がある。そこからスタートしていこうというのが、作戦会議です。

その目標があったとて、上手くいかないことがあります。イラストの男の子ですけれども、どうして上手くいかない時があります。例えば、勉強ができるようになりたい、漢字が書けるようになりたい、算数が解けるようになりたい。ただ、上手くいかない時がありまして、その子からしてみたら、上手くいかないのは大事件なんですね。「この世の終わりだ」ぐらいの勢いで悲しくなってしまう。僕は学校で子どもたちと授業をする時に、このコースを「この世の終わりだコース」と説明をしています。

「この世の終わりだコース」に入ってしまうと、もういいや、わかんないし失敗は嫌だしという風に、積み重ねられないまま、学ぶチャンスを失ってしまいます。

逆に、失敗しても気にせずに取り組めるようになっていくコースのことを「まっいっかーコース」と呼んでいます。こっちのコースになると、上手くいなくても失敗しても大丈夫、何でも積み重ねてくれる。こちらの「まっいっかーコース」に進んでいくために大事になってくるのが、最初のキーワード「作戦」ですね。一体、あなたがやりたいことができるようになるにはどうしたらいいのか、という

「作戦」が大事になってきます。

子どもの成長って何だろうと考えた時に、大きく3段階に分かれます。1つは、「子どもができていくこと」ですね。一番外側の3段階目には「できないゾーン」があります。黄色の所「できることとできないことの間にある芽生え」が成長のポイント、ここが保育や教育、作業療法士が関わって広げて伸ばしていく部分になってきます。ここから先は、この芽生えの部分を、一体どうやったら広げていけるのかというお話をしていこうと思います。

皆さん、前を見て頂きまして、ちょっとここから、ロールプレイというものをやってみようと思います。(山口氏参加)

ここにいる人は、小学校4年生の太郎君だと思ってください。太郎君は、いつも一生懸命授業に参加しています。黒板に書いてある文字を一生懸命書くけれども、いつもマスからはみ出してしまうし、力いっぱい書くので疲れてしまう。集中力も落ちてきて上手くできない。しかも、しまいには叱られてしまう、というような状況です。

今からやるのは、NOT GOOD、よくない関わり方だと思ってください。

「太郎君、太郎君、ノートを書くのはいいんだけど、もうちょっとまっすぐ座れる？」

「まっすぐ座ってるよ」

「もっと背もたれにしっかり背中をつけて。そうそう。ノートはみ出ちゃってるから、机の上に乗せて。またちょっと傾いてきてるから、太郎君、背中つけてくれる？」

「書けない」

「また足も出てきちゃってるし」

「もうやだ」。

という風なことですね。これ、実際によくあります。出ていかないにしても、なかなか上手く座れない。何とか上手くやってほしいという思いで声をかけ続けるけれども、お子さん自身は上手くできなくて気持ちが下がってってしまうことがよくあります。

次は、とりあえず今日の勉強の中ではGOODな関わり方です。

板書している太郎君に注意するのではなくて、

「太郎君、太郎君、もっと書きやすくなったら先生はいいなと思うんだけど、今太郎君どうしていききたい？」

「頑張って書いてる」

「今頑張って書いてくれてるけども、先生としては、もっと太郎君がカッコよく書けるようになるといいなと思ってるんだけど、どう思う？」

「カッコよくなりたい」

「じゃ、カッコよくなるための作戦をこれから一緒に考えていきたいなと思うんだけど、いい？」

「めちゃくちゃいい」

「じゃ、ちょっと作戦を考えていってみよう」。

というので、一緒に目標を決めていきます。

(うつぶせで書く太郎君に)

「太郎君、まず最初に、椅子はどこに座っていると書きやすいの？」

「いいの？」

「どこでもいい、好きなように座ってみて」

「がちっとしないとブルブルして書けないから、本当はお家ではこうやってやってるんだ」

「あ、椅子を横にしてやってるんだね」

「そうすると手が使いやすくなる」

「なるほど。いいね」

「ちょっと書きやすくなる」

「ほんとだ、書きやすくなったね。じゃ、太郎君、肘は上がった方が書きやすい？ 下がってる方が書きやすい？」

「わからん」

「じゃ、ちょっとやってみようか」

「こうするとちょっと書きにくくなる」

「腕はどこにあると書きやすくなる？」

「こうかこう。(体に)付いてると字が書きやすい」

「あ、ほんとだ。太郎君、何かカッコよく書けるようになってきたね」

「え、カッコいいの？」

「カッコいいです」

「何が？」

「姿勢もバシッという感じだし、字がすごく綺麗になってるよ」

「あ、ほんとだ。ちょっとカッコいい」

「めちゃくちゃカッコいいと思う」

「いいの？ これ、カッコよくていいの？」

「すごくいい。カッコよくていいです。じゃ、最後、この書き方の作戦に、名前をつけてもらってもいいですか」

「体くっつけ作戦」

「じゃ、これからは授業の時、体くっつけ作戦でやっていってみようね。ありがとう、太郎君」

「こっちこそありがとう」。

皆さん、お付き合い頂きありがとうございます。（拍手）

山口：ちなみに、太郎君は左手と右手が協調しないので、真ん中を越えると書けなくなるんですよ。実際にいたお子さんです。肘を上げると手が緊張して、カクンカクンとロボットのように書けていたという事例です。ありがとうございました。

奥津：では今、NOT GOODとGOODのロールプレイをご覧頂いたんですけども、一体何が違ったんだろうというのを、1分時間を作りまして、隣の人と話し合ってみてください。どうぞ。何が違ったのかをちょっと考えてみてください。（話し合い）

そこまでです。では、前を見てください。

NOT GOODとGOODの違いって何だろうとなった時に、すごく簡単、シンプルです。「強制する」という言葉が聞こえてきましたけれども、いわゆる、Teachingというのは「教える」ということです。「教える」ことと、もう1つ後半に行っていたことが「Coaching（質問すること）」です。ここが前半と後半で、すごく大きく違っています。

教育の世界も教育改革がありまして、教える教育から教えない教育に、今、大変換しています。教え

ない教育とは一体何なのかということですが、子どもたちが自分で考えて、自分で行動して、自分で成長していくように教育していくという風に、教育改革が今日本で行われているんですね。そのために必要になってくるのがCoaching、質問して子どもたちの力を引き出していくことが重要と言われています。

これが最初にお話ししていたCO-OPアプローチです。これは本当にシンプルです。目標を決めます。目標というのは、「子どもたちがしたいこと、できるようになりたいこと」。目標を決めたら後は簡単。できるようになるために、どんな工夫、作戦を考えていけるんだろうという風に、子ども自身のアイデアを大人が膨らませていきます。膨らませるコツとしては、教えずに質問することですね。それを広げてアイデアが膨らんできたら、実際にやってみようよ、やってみてあなたにとってその工夫とか試したことはどうだったの？良かったの、良くなかったの？もっとどこを良くしたらいいの？という風に、「ぐるぐる回して目標を達成していく」という、Coachingの方法です。

もしかしたら皆さんの中にも、小学生のころ漢字を覚えるのに使っていた方がいるかもしれません。「親」という漢字を覚える時に、子どもによっては「立つ」「木」「見る」で「親」と覚えたり、瞬きをするとシャッターのように覚えられる子がいたり、あるいは呪文作戦、「立つ木の横で見ている親」という風に覚える子がいたり、「親」という漢字が人の顔に見えると言う子もいました。作戦の一例ですけれども、何にでも「作戦」は使えて、かつ勉強でも友達関係でも人間関係でも考えていけますよというものになります。

時間が迫ってきたので、1個だけ、みんなで「作戦を立てる」というのをやってみようと思うんですけども、制限時間は1分でいきます。「薔薇」という漢字を1分間で書けるようになってください。どんな覚え方をしてもいいです。1分後に消して、皆さんに「片隅に書いてください」と言いますので、やってみてくださいね。よーい、スタート。

山口：アイデアを書き出してもらってもいいですよ。

奥津：隣の人と相談してもらってもいいです。

では皆さん、レジユメの片隅に「薔薇」という漢字を書いてみてください。小さくてもいいです。ひとまず「薔薇」という漢字が今の1分間で書けるようになったという人、どれぐらいいますか。だいぶ書けるようになりましたね。はい、ありがとうございます。

今やってもらったのは、皆さんの能力を伸ばしたわけではないです。能力の使い方を工夫したら、や

れることが増えましたというワークでした。

最後にお伝えしたいことは、「失敗のない世界へようこそ」という所です。頑張って努力してやるほどに、上手くいかなかった時、僕が悪かった、私が悪かった、自分のせいだ、となりやすいんですね。CO-OPというのは、上手くいかなかったのは、「その人」が悪いんじゃないくて、「作戦」が上手くいかなかっただけだよ、ということになります。だから、次は作戦を変えてチャレンジしていこうよという風に進めていくと、「まっいっかー」と失敗してもへこまないし、次のチャレンジが続けていける子どもたちになっていきます。

最後に振り返りです。本日の問いは「私たちは子どもたちとどう向き合ったらいいのか」という所でした。結論としまして「子どもと大人の夢中をぐるぐる回す」。ポイントは3つです。作業療法は「ざんまい」療法、大人が子どもにしかける「発達地図」、子どもが大人にしかける「作戦会議」というポイントでした。図にするとこんな感じです。大人から子どもにしかけていくし、子どもからも大人にしかけていく。このぐるぐるが回っていった時に、子どもと大人のスパイラルアップ、相互発達、みんなが一緒に成長していけることが実現するようになってきます。

そんなことを目指しながら、僕たちは2人でYou Tube「はびりす発達Q&A」というのをやっております。よければ見てみてください。チャンネル登録してもらったら、とても嬉しいです。他にもLINEとかFacebook、Instagram、Twitter (X)、他SNSをたくさんやっています。興味のある方は、ぜひぜひ覗いてみてください。

本日の僕たちの講義はこれでおしまいになります。

山口： 皆さん、ありがとうございました。（拍手）